

イラン情勢、アメリカ側の視点

前嶋和弘

maeshima@sophia.ac.jp

1 ソレイマニ司令官殺害について

- ・イラン核合意離脱以降の「腹の読みあい」：福音派のイラン嫌い。アメリカの「不作為」
- ・昨年末にイランの支援を受けるイスラム教シーア派武装組織の支持者らが在イラク米国大使館を襲撃、その後の反米デモなどはアメリカでは北朝鮮問題以上に大きく報道
- ・1979年にイラン米国大使館人質事件を彷彿、トランプ氏には当時の記憶はいまだに痛烈
- ・2012年のリビア・ベンガジでのアメリカ在外公館襲撃事件も想起：トランプ氏や、当時下院議員でベンガジ問題迫及の急先鋒だったポンペオ国務長官にとっては、看過できず
- ・トランプ政権は、サイバー攻撃といった影響の小さい他の手段もあったが、ブッシュ、オバマの歴代政権が手を出さなかった司令官の殺害という大きな賭けに出た。「強い米国」を示す一方、一触即発の大戦争になるリスクも。
- ・「自衛行為」といってもアメリカに迫った危機が説明されず：割れる米世論

2 イラン報復とトランプ記者会見

- ・イランの米軍への報復攻撃に関しては、中西部アンバル州のアサド空軍基地と北部アルビルの基地の2カ所が標的だが、被害は限定的。基地内の米兵がいないところが攻撃されるなど、事前に情報が米側に漏れていて両国の派手な出来レースともされる。
- ・トランプ大統領の発言（「軍事力を行使したくない」）はかなり抑制的。大規模戦争に発展する最悪の事態は回避。大規模紛争はイランもアメリカも避けたい。
- ・あれだけイラク戦争を非難していたトランプ氏にとっては、無茶な戦争は起こさない方が得策だというのが合理的。「世界の警察官」を辞めるベクトル
- ・中露にとって「イランと命運を共にして、アメリカと大戦争をする」とは考えにくい
- ・トランプ氏にとっては、「予測不能で強硬な手段を使う」ことを明示し、イラン側が安易な米国への挑発や大使館包囲などをしづらくなったということでは「勝ち」といえる。北朝鮮に対するメッセージでもある。

3 それでも不安定な見通し

- ・イランの核開発の進展度合いによっては、アメリカ、イスラエルの本格的介入も。
- ・米国とイランは再び衝突するコースの上において、いずれ衝突するというのが実情。
- ・イランや反米勢力と米国との小規模な衝突でも緊張は一気に高まる。
- ・「強いアメリカ」を誇示したいトランプ氏の意図と「引いていくベクトル」とのバランス
- ・イランはトランプ氏が大統領選で敗北し、米国が核合意に復帰することを望んでいる。
- ・ソレイマニ氏が抑えていた過激派組織が活性化し、反米活動を強める可能性